

荒木牧人作 「天の記念碑」

<前編> スクールが来た

飯塚直人 遅いなあ、弘美のやつ。もう10分も過ぎてるぞ。早くしなきゃ、ほかの人に迷惑かけるじゃないか。

直人ナレーション おれの名前は飯塚直人。私立男子高1年。部活はサッカーやってるんだけど、今日から2週間、休部して“ワークキャンプ”というのに参加するため、タイに行くんだ。ちょうど学校も冬休みだしね。

森岡弘美 ごめーん！ほんとにごめん。持ち物入らないから、詰め直していたら遅れちゃって…。

直人 言い訳無用。

ナレーション 時間にルーズなこの人は、森岡弘美。私立女子高1年。おれは幼なじみだ。このワークキャンプのこと教えてくれたのも、彼女なんだ。

弘美 直人、クラスメートの谷口こずえさん。愛称“こずちゃん”と田中ルミさん。あたしにこのキャンプ教えてくれた人たち。

谷口こずえ 谷口こずえといいます。よろしく。

田中ルミ 田中ルミです。よろしくお願ひします。

直人 僕は飯塚直人です。よろしく。

こずえ 直人君のお父さんとお母さんは、このキャンプの参加、すぐ認めてくれた？

直人 う、うん、まあね。

ナレーション そんなわけないのだ。初め母さんにこのことを言ったら、頭から大反対されてしまった。「何でそんなボランティアのため、費用が何十万もするの？うちがボランティアしてもらいたいわ」って。でもおれはあきらめなかった。中3の時、社会の時間、飢餓について学び、そして今、現在の世界の飢餓の状況を知り、驚かされたんだ。「何かおれにできることはないのか？」そんな時、弘美がこのキャンプのことを教えてくれたんだ。

(効果音) (空港)

ナレーション おれたちが空港に着いた時は、集合時間の5分前だった。Cカウンター前に着き、もうそろっていたほかのワークキャンプ参加者に明るく自己紹介をして、出発まであと2時間、ひよっとしたらもう見られなくなるかもしれない日本の風景をしかと見届けていた。

赤城智弘 さあ皆さん。出発しますので、自分の手荷物を持ってください。

一同 (口々に)は - い。

(効果音) (歩く足音)

ナレーション この人は赤城智弘さん。このキャンプを主催している国際飢餓対策機構、フー

ズ・フォア・ハングリー・インターナショナル、略して FHI の日本支部の社員。今回現地で働いたり、各地を視察したりするため、おれたちを引率してくれるんだ。何でも、お父さんは牧師さんなんだそうだ。

直人 赤城さん、毎年こうやってキャンプの引率してるんですか？

赤城 毎年ってわけじゃないけどね。これで3回目なんだ。でも、3回とも国は同じタイでも別の場所だから楽しみだよ。あ、ユナイテッド航空 805 便、26 番ゲート。うん、あの飛行機に乗るんだ。

直人 飛行機初めてだから酔ったらどうしよう。

赤城 大丈夫。もし窓際に座ったら、外を見てごらん。雲がなかったら、本物の日本地図が見られるよ。台湾の地図もね。

直人 本当ですか？

ナレーション 飛行機に乗ると、おれの番号は運良く窓側になっていた。シートベルトを締めると、機内放送が流れた。

機内放送 (フィルター音。ナレーションのバックで)ユナイテッド航空 805 便バンコク行き、間もなく離陸いたします。どなた様も、もう一度シートベルトをお確かめ下さい。

ナレーション 初めゆっくり動いていた風景が、見る見る流れ、急に胸に重い圧力がかかって、体が逆様になったような気がした。しばらくの間、上へ上へと昇っていた飛行機は、ようやく機体を水平に戻した。その時、目に入ってきたのは、綿やソフトクリームのような雲の海だった。その上に、このガラスを破って乗ってみたいと思った。間もなく飛行機はタイ空港に着陸した。空港の時計を見ると、夜 7 時ちょっと前だった。

こずえ 疲れたー。

ルミ 死にそー。

弘美 疲れたよー。今何時？

直人 7 時だよ。

こずえ ウッソー！ あたしの時計、9 時ピタシだよ。ん？ 何で？

直人 ここはタイじゃないか。時差があるんだよ。

ルミ そっかあ。それじゃ日本とここでは 2 時間こっちが遅いわけ？

直人 そうだよ。常識さ。

ナレーション とは言ったけど、ほんと言うと、おれも空港に着いた時は、時差のことなどケロリと忘れて、「7 時にしちゃ眠いな」と思っていたのだ。ホテルは空港から 10 分ぐらいのところに入った。

(効果音) (バスの音)

赤城 はい、皆さん。今日は本当にお疲れ様でした。おなかも機内食でもう十分だと思うので、今日、あとは自由時間にしたいと思います。部屋は 2 人一部屋ですので、皆さん、組を作ってください。

弘美 こそ、あたしもう404 のカギもらったけど、404 でいい？

こずえ うん、いいよ。直人君、部屋何号室が決まった？

直人 いや、まだ相手が…。

樋口一平 同じ部屋になりませんか？

ナレーション と言ってきたのは、おれと同じ高 1 の樋口一平だった。北海道からこのキャンプに参加するため来たそうだ。

弘美 よかったね、直人。

直人 よろしくね、一平君。

一平 こちらこそ。

ナレーション 次の日の朝は早かった。朝 4 時 30 分に起きて、5 時ホテルを出発し、いざワーク地ブリラム県ノンディンダン村へと突き進むのだった。だがみんなの目は、まだ半分も開いていなかった。

一同 (口々に)「おはよー」「眠いー」「ちょっとハードスケジュールだよ」

宮坂まみ おはようございまーす。まだまだ寝たりない人がいると思いますが、車の中で十分寝られます。えー、大体 9 時間から 10 時間くらいかかりますので、車酔いしてしまう方は酔い止めをもう飲まれたほうがいいと思います。

ナレーション この人は宮坂まみさん。赤城さんと共に僕らを引率してくれる、FHI の女性コンダクターだ。

車の中から周りの町並みを見ていたのだが、タイという国はどうも危険な国だと思った。バイクは 2 人乗り、しかもヘルメットもしていない。それが、3 車線からいつの間にか 4 車線になっている道路の車の、わずかな透き間をヒョンヒョン通っていく。車は車で、平気で 100 キロぐらいでビュンビュン走っている。都会で育ったおれだが、同じ都会でも、こうも違うと変な気がしてきた。

長い長い時が過ぎ、ようやく、緑広がるノンディンダン村へと到着した。村は、なんかの草でふいたような屋根の小さな家が並んでいて、何となくカルチャーショック。こう言っちゃ悪いんだけど、“貧しい”って言葉が初めておれの中でイメージを持ったような感じだった。

フリット ようこそ、いらっしやいました。

赤城 ナイス・トゥーミー チュー、ミス・フリット。えー、この人は FHI のこの村の現地スタッフのリーダーをしているフリットさんです。

一同 ナイス・トゥーミー チュー。

ナレーション こうして、あとでおれたちが“地獄の 7 日間”と呼んだワークキャンプが本格的に始まったのだ。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 次の日、ワークは朝の 9 時からだった。

フリット 今年のワークプロジェクトは“この荒野に水路を引き、その水路を利用して辺り

に緑を増やし、最終的には畑に使用“というプロジェクトです。そうやって、足りない食糧を、輸入に頼らず自分たちの手で確保しようというわけです。皆さんは、その灌漑用水路を造る作業をしてもらいます。

赤城 では皆さん。ここにクワやスコップがあるので、これを使って、白いヒモの張ってある内側の土を掘り起こしてください。とにかく本当にゆっくり作業しないとバテてしまいます。疲れたら休むなり交代するなりしてください。

一同 (口々に)「はーい。」「さあ、やるべ。」「あたし、スコップ取りー。」「おれはクワ使おうと。」

ナレーション じりじりと照りつける太陽の下、おれたちはゆっくり、本当にスローに作業を続けた。暑い。とにかくジュワーツと暑さが体の中まで染み込んでくる。気温が体温より高いのと、日差しがあまりにも強いということで、みんな、長そで、長ズボンに帽子、軍手の完全武装だった。だが、おれと一平だけは違った。日焼け用オイルを体中に塗り、上半身裸で、下は短パンというスタイルで、作業を続けていた。お昼は意外に早くやってきた。現地の人たちが食事を作ってくれた。めちゃくちゃ辛かったけど、おいしかった。午後になり、また同じように作業を続けた。

一同 (口々に)「この土、固ーい。」「暑いよー。」

(効果音) (村人のガヤ)

赤城 村の人の話だと、あと5分もするとスコールになるそうなので、今日は作業終了ということになりました。クワとスコップはまとめて1箇所に置いてください。あ、降ってきた。さあ早く皆さん車に乗ってください。

ナレーション スコールは一瞬のうちに襲ってきた。それは‘降る’なんてものじゃなく、まさしく水の弾を空から機銃掃射されたようだった。

(効果音) (土砂降り)

一同 (口々に)「わー冷たーい。」「ドヒャー！」

ナレーション みんな、なんだかんだ言いながらも、顔が喜びで満ちていたのをおれは見逃さなかった。もっとも、おれ自身もしっかり喜んでいただけ。

フリット 皆さん、今日はお疲れ様でした。夕食ができていますので、どうぞ召し上がってください。

まみ サンキュー、フリット。えー皆さん、今日はお疲れ様でした。こんな感じの日が、日曜日を除いてあと6日間続きます。体調を崩さぬよう気をつけてください。今日は夕食後、すぐ寝たほうがいいわよ。

弘美 もう眠ーい。

ルミ もう寝てる。

こずえ 今寝たーい。

赤城 ダメ。食事はきちんととるんだ。

ナレーション 赤城さんの言ったとおり、次の日も、その次の日も、厳しい暑さの中でのワークが続いた。そしてとうとう、参加者の中で2人、高熱を出して寝込む人が出てきた。僕と一平の体は現地の人と同じくらい黒くなっていた。灼熱しよくねつのワークでのスコールはまさに天の助けだった。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 日曜日になっても雨は降り続いていた。そんな中、ワーク参加者全員で教会へ行った。タイは仏教国だから、お寺へ行くのかと思ったけど…。おれは教会に行くのは初めてだった。けど、ワーク参加者のほとんどの人が、キリスト教の教会に通っているそうさ。一平もその一人だった。

一平 僕は小学2年生の時から教会に通い始めたんだ。そこで友達も増えたとし、何か学校とは違う楽しさがあったんだ。

直人 ふーん。

弘美 教会って、何か硬い感じしてたけど、イメージしてたのと全然違うね。

直人 うん。

こずえ 実はあたしも、もうずっと前から教会に通ってたんだ。

ルミ 本当？ 知らなかったー。

ナレーション “仏教国のタイで、初めてキリスト教の教会に行くってのも、面白い体験だな”とおれは思った。言葉も何も分からなかったけど、タイのクリスチャンの人たちの、まるで顔が輝いているような笑顔が、ヤケに心に残った。教会の礼拝が終わっても、まだ雨はやまないの、午後はずっと部屋の中で遊んでいた。しかし、この降り続く雨が、とんでもない結果を招くことになるとは、だれも知らなかった。

<後編> 「はだしの少年」

ナレーション 次の日、ワーク5日目。ワーク地に行き、おれたち全員、あ然としてしまった。何と、昨日、おとといと降り続いた長い長いスコールのせいで、土砂が流れ、今まで苦労して掘り続けた水路が、ほとんど全部埋まってしまっていたのだ。さすがの赤城さんもこれには参ったようだった。

赤城 スケジュールが変更になったので、よく聞いてください。この雨で、我々のワーク期間中に用水路が完成する見込みは立たなくなりました。でも、我々が帰ったあとは、現地の人引き続いて用水路を完成させてくれます。残念ながら記念碑はできませんが、しょうがありませんね。

直人 記念碑？ 何ですか、それ？

まみ 今年のワークキャンプは、ここでこれを造ったんだという記念の小さな石碑を建てるんだってんだけど…。

直人 そうか。ちょっと残念だな。

こずえ このタイに、あたしたちのやったことが長く記念碑で残るなんて、ステキなのに

ね。

ルミ

あたしたちの努力の跡が何も残らないわけ？

弘美

でもいいじゃない。この間の教会のお話でも、「神様はすべてをご存じだ」って言ってたし。

一平

そうなんだ。僕たちとタイの人たちが協力して、この国の人たちが少しでも豊かになるために。用水路を造ったってことは、天の神様の記念碑にはちゃんと書かれてんだよ。

直人

ふーん。「天の記念碑」か…。

ナレーション

それからおれたちは、埋まってしまった用水路を掘り出し始めた。昼に近づくに連れ、日差しは更に強く照り付け、流れてきた土砂を固まらせた。コンクリート並みに固くなってしまった土を、おれたちは無言で掘り続けた。午後になっても、衰えを知らぬタイの暑さの中、みんな頑張っていた。風が幾分吹いてきたが、スクールはまだ来そうになかった。そして更に1時間、結局その日、スクールは来なかった。

赤城

皆さん。今日も本当にお疲れ様でした。あと2日間です。

一平

あれ？ 弘美さんは？

まみ

ワークから帰ってきた時、急に「気持ち悪い」と言ったので、先に部屋に帰って休んでるわ。

こずえ

あたし、様子見てきます。

ルミ

あたしも行く。

赤城

じゃお願いします。熱が上がったりしたら、すぐ知らせてね。

ルミ

はい。

赤城

今年のワークキャンプはヤケに病人が多いなあ。皆さん、食べ物や水など日本等に注意してくださいよ。

一同

はい。

ナレーション

その夜、大変なことが起こった。弘美の熱が上がり続け、直ちに病院に行かなければならなくなった。病院と言っても、ここから車で8時間もかかるそうだ。それならいっそ、首都バンコクの大きな病院へ行って診てもらったほうがよいという結論が出た。ほかの2人の病人も、熱は下がったが吐き気が続いていたので、この3人と引率のまみさんの4人は、一足先にこの村からバンコクへ戻ることになった。夜中の12時、この一行はバンコクへと向かった。

(音楽)

(ブリッジ)

ナレーション

ワークキャンプも6日目。何とも言えないすばらしい青空が広がっていたのだが、参加者全員の心は朝から重く沈んでいた。

直人

一平？

一平

(弘美の回復のために祈っている。)え、何て？

直人 何してんの？
一平 お祈りしてんだよ。
直人 お祈り？
一平 うん。直人も、何でもいいから思ったこと、神様に祈ってごらん。
ナレーション そう言って、一平はお祈りの格好をしてみせた。おれは一平のまねをして手を組み、頭を下げ、生まれて初めて「祈り」を口にした。
直人 神様、弘美たちを守ってください。
ナレーション その日はいつもより 30 分遅れでワークは始まった。毎度毎度の暑さにはやはりみんな参っていた。それでも、みんなはせっせと土を掘った。昼休み、用水路の溝に腰掛けて食事をしていたら、いきなりスコールが降ってきた。
(効果音) (土砂降り)
ナレーション スコールは降り続け、結局午後のワークは中止になってしまった。もううれしくも悲しくもなかった。帰ってから、一平と近くのお店へ行った。
直人 一平、見てみるよ。これ、グリコの「ポッキー」かと思ったら「ホッキー」だってよ。偽物じゃん。
一平 ああ、本当だ。両方買って味を比べてみようよ。
直人 オーケー。あ、向こうから来るの、ワリットさんじゃない？ 買い物しに来たのかな。
ワリット やあ、直人君に一平君。お菓子買いに来たの？ あ、そうそう。弘美さんたち、無事バンコクに着いて病院に入院したそうよ。もう大丈夫よ。
直人 本当ですか？ よかったー。
一平 よかったね。
ナレーション おれはその時、「神様はおれの初めての祈りを聞いてくれたのかな」と思った。帰ってから、買ってきたポッキーとホッキーの味比べをした。ポッキーのほうが全然おいしかった。その夜はもうすることがないので、床に入った。
次の日、何と朝の 4 時半に起きてしまった。やはり昨日、早く寝すぎたのだ。
直人 一平、一平。
一平 うーん、何だよ。今何時？
直人 4 時半ちょっと過ぎ。
一平 何だよ、もっと寝かせてよ。
直人 だって今日はワーク最終日だぜ。この村とも今日でお別れなんだ。な、起きろよー。
一平 うー眠いよー。ほうっておいてくれよー。
ナレーション おれはしょうがなぐ独りで早朝の散歩に出た。昼の地獄の暑さとは打って変わって、明け方は少し冷えた。村の朝は思ったより早く、もう開いている店もあった。商店街を歩いているその時だった。おれの目に、寄り添って店の端に座っ

て、道ゆく人に何か言っている、2人の少年の姿が映った。兄弟みたいだったが、一人は10歳くらい、もう一人は5、6歳くらいの子だった。こんな冷える朝に、Tシャツと短パンしか着ていず、はだしだった。

直人モノローグ どうしたんだろう、この子たちは？ まさかこじき？ かわいそうに、恵んでやろう

ナレーション その時、赤城さんが日本をたつ前に注意をした言葉が耳の奥で聞こえた。

赤城 (エコー) もし物請いの人がいって、「何か欲しい」と言ってきても、お金とか食べ物とか与えないでください。それは、その人にとって本当に幸せかどうか考えてみたら分かると思います。

ナレーション おれはその場から足早に離れていた。

7日めの最終ワークは午前中で終わりということになっていた。最後だからと、みんな全部の力を出し切ってワークしたが、それでも用水路は完成しなかった。ただど一応無事ワークスケジュールを終えたことで、みんな満足しているようだった。

赤城 長かったワーク、皆さん本当にご苦労様でした。今日は午後6時まで自由時間ですので、のんびり過ごしてください。

一平 よーし、直人、お土産。お土産買いに行こう。

直人 うん。あ、そうだ、弘美とこずえちゃんのお土産、どうしよっか？

まみ ああ、直人君、そのことなら、あたしがこずえちゃんからちゃんとして2人の買い物リスともらってるから、任せといて。

直人 あ、そうですか。すみません。

まみ いいのよ。その代わりに、こずちゃんにはバンコクでレインボーパフェおごってもらおう約束だから。

直人 チャッカシしてますね。

ナレーション 僕と一平は、村一番の商店街へ行って、お土産を買いまくっていた。ようやくすべて買い終えた時、朝の散歩で通った商店街に出た。おれはふと、あの2人の少年の事を思い出し、あの店の近くに行ってみると、何と、まだ同じ所に座っていた。

直人 一平、あの2人の子、今日、朝散歩に来た時からずっとあのままだよ。

一平 かわいそうにね。

ナレーション そう言うただけで、横目で少年を見ると、おれたちはまた歩き始めた。

赤城 明日の朝は、ここを4時に出発しますので、そのつもりで荷物をまとめておいてください。

一同 (口々に)「きついよ、4時は。」「徹夜しようかな。」

ナレーション その夜、おれは妙にあの2人のことが頭にあって眠れなかった。「どうしておれは何もできないんだろう。このまま日本へ帰ってしまうのか。」など、いろいろ考

えていた。

一平 (あくび)直人、寝ろよ。明日朝早いぞ。

直人 うん。でもあの2人のこのことが頭ん中であって眠れないんだ。

一平 それなら聖書を読んでから寝な。お祈りもしてね。

ナレーション 一平はそう言うとすぐ寝てしまった。「よし、読んでみるか」と思ったが、どこを読むのかわからない。おれは適当にページをめくった。

直人 よし、ここに決めた。えっと、マタイ25章？ま、いいか。

ナレーション おれは、その箇所を読んで、なぜかものすごく感動した。そして、眠り込んでいる一平を無理やり起こした。時計は夜中の3時を指していた。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 次の日の早朝、いよいよ日本へ帰る日、バンコクへ向かう車の中で、おれはつらかったけどいろいろ楽しかったノンディンダン村での思い出を、今こうやって見ているタイの田園風景とともに、胸に刻み込んでいた。

直人 一平、ありがとう。

一平 え、何が？

直人 うん、いろいろとな。今朝のことも。おれ、日本に帰ったら、教会に行ってみる。弘美も誘ってね。

一平 本当に？ やったなー、うれしいよ。それにしても、真夜中になんであんなこと、思い立ったんだ？

直人 うん。ゆうべ、一平に「聖書読んで寝ろ」って言われただろ？ そのあと、どこ読んでいいかわかんなかったんだよ。だから適当に聖書開いたら、マタイ25章ってところだった。そこのこんなことが書いてあったんだ。

聖書朗読 (マタイ25章、35、36、40節)あなたがたは、わたしが空腹であった時、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていた時、わたしに飲ませ、わたしが旅人であった時、わたしに宿を貸し、わたしが裸の時、わたしに着る物を与え、わたしが病気をした時、わたしを見舞い、わたしが^ろうにいた時、わたしを訪ねてくれたからです。…誠に、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちの一人にしたのは、わたしにしたのです。

直人 これって、もしかして、ほんとに貧しくて困ってる人に何かしてあげるのよ、そのイエス様にしたってことだろ？

一平 そうだよ。ああ、それで今朝、僕を誘って、あの子たちに僕たちの靴をそっと置いてきたってわけか。「何も言わず、おれの言うこと聞いてくれ」って言うから、言われるとおりにしたけど。

ナレーション そうなんだ。朝5時、ノンディンダン村はいつもと変わりなく動き始めただろう。そして朝日がもっと昇って、村を照らし出したら、あの2人の少年は目を覚まして、驚いたと思うな。このキャンプ中、おれと一平がずっと愛用していたワーク

シューズが、きちんとそろえて目の前に置いてあるのを見て。今、おれたちははだしで、猛烈に眠かった。でもなぜかその時、おれの心の中はジーンと熱くなっていた。そして、「これも『矢の記念碑』に書かれてるかな」と、ふと思ったのだった。

< 完 >